



Title	＜書評＞松本和也編『テキスト分析入門 小説を分析的に読むための実践ガイド』（ひつじ書房）
Author(s)	寺澤， 誠人
Citation	太宰治スタディーズ 別冊. 2017, 3, p. 27-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

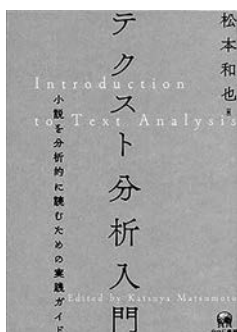
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

松本和也 編 『テキスト分析入門

小説を分析的に読むための実践ガイド』



■目次

- 第1章 テクストを分析的に読むために
- 第2章 ウォーミング・アップ —— 夏目漱石『夢十夜』「第一夜」
- 第3章 知足と安楽死を超えて —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅰ
- 第4章 語ること・見ることとテキストの仕組み —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅱ
- 第5章 謎と反復をめぐるテキストの仕組み —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅲ
- 第6章 “奇蹟”の読み方／読まれ方 —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅰ
- 第7章 語り手はどこにいるのか —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅱ
- 第8章 寄生する語り手の欲望 —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅲ
- 第9章 “名作”が名作になるまで —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅰ
- 第10章 偽装された“現在” —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅱ
- 第11章 通過儀礼としての旅の時空 —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅲ
- 第12章 あふれる“いのち”の文学 —— 岡本かの子「老妓抄」Ⅰ
- 第13章 老妓の物語から「作者」の物語へ —— 岡本かの子「老妓抄」Ⅱ
- 第14章 死を予見し、死を悼む —— 太宰治「桜桃」Ⅰ
- 第15章 語れないことを読む —— テクスト分析の先へ — 太宰治「桜桃」Ⅱ

松本和也 編

『テキスト分析入門 小説を分析的に読むための実践ガイド』

寺 澤 誠 人

テキストを分析的に読む——。テキストを研究の名の下に読むことは、簡単なようでとても難しい。日本近代文学研究の領野では、最大公約数な読み方ではつまらないと言われがちだし、アクロバティックな読み方は、テキストの読解可能性や新たな一側面を提示するという意義を持ちながらも、一方で、自己満足的な解釈ゲームの側面も免れない。そもそも、「テキスト分析」という営為はどういったもので、「テキスト分析」にはなにが必要なのだろう。そして、「テキスト分析」は「読解」や「解釈」とはいかに異なるのだろう。テキストを分析的／研究的に読むというのは、具体的にはどういったことなのだろう。

『テキスト分析入門』は、一面では近代文学研究の必携本でありながら、その性質は、様々な「文化テキストの応用」に可能な、非常にすぐれたテキスト分析のための入門書である。

第1章でも述べられている通り、本書はテキスト分析の①理論書であり、テキスト分析の②実例集でもありながら、③小説表現史、④近代文学史を学ぶこともできる書となっている。重ねて、私見では、本書は①～④としての意味を持ちながら、近代文学を専攻する学生にとって、先行研究のまとめ方や問題点、そうした点を踏まえ、自らがどうテキストを分析し論じることといった過程そのものの参考／実用書ともなっている。

まず、本書の性質と構成を確認してみたい。本書で取り上げられるテキストとしては、近代日本文学における重要な作家・作品が並んでいる。以下にその作家・作品群を確認してみると、夏目漱石『夢十夜』「第一夜」(第2章)・森鷗外「高瀬舟」(第3・4・5章)・芥川龍之介「南京の基督」(第6・7・8章)・川端康成「伊豆の踊子」(第9・10・11章)・岡本かの子「老妓抄」(第12・13章)・太宰治「桜桃」(第14・15章)であ

る。なお、巻末にはこれらの作品の本文（全文）も掲載されており、本書を読みながら、分析対象自体（当該作品）も確認することが出来る。

構成に関していえば、各作家・作品のトピックは前後半にわけられ、前半では、その作家・作品の評価史や先行研究状況が簡潔ながら重厚にまとめられている。そして、後半では前半の議論における問題点を引き継ぎながら、主にジェラルド・ジュネット／花輪光・和泉涼一訳『物語のディスコース 方法論の試み』（書肆風の薔薇、昭60）の物語論を援用しながら、テクストを、理論（焦点化／話法（距離）／語りの時間／語りの水準など）を用いて分析的に読むという試みの実践がなされている。

こうした前後半の構成は、大学のゼミナールにおける標準的な作品研究のスタイルと一致しており、本書がテクスト分析の入門書にとどまらず、近代文学研究の参考／実用書としての意味合いも持っていることを示している。

特筆すべきセクションとしては、川端康成「伊豆の踊子」（第9・10・11章）と岡本かの子「老妓抄」（第12・13章）が挙げられる。この二つのテクストに関するセクションは、前までに学んだ理論・ポイントも活用しながら、議論自体が作品論として成立するような、高いレベルでのテクスト分析（＝実例）がなされているからである。

前者では、前半では川端康成及び、その代表作である「伊豆の踊子」の評価史や研究史におけるマスメディアの機能と作品

のノン化ついでの問題がわかりやすくまとめられており、後半では、「伊豆の踊子」の語り手である「私」の内面」が審議され、メタ的な視点で「私」がこのテクストを語った意義が示されている。

後者では、本書が唯一取り上げる女性作家の評価をめぐる、作家イメージの形成の過程について、簡潔かつわかりやすくまとめられており、後半では、「老妓抄」の語りで特徴的な話法の用法に着目しながら、小説内「作者」や和歌で結ばれるテクストの語りの技法について、高度な分析が展開されている。

全編を通してではあるのだが、特にこの二つのセクションは多くの先行研究を持つ作品の評価史・研究史のまとめ方の参考にもなるし、そこから切り口を見つけ、いかにテクストを分析し論じるといった点でも、すぐれた手本となっている。

今まではテクスト分析の入門書として、その代表的なものと言えば、前田愛『増補 文学テクスト入門』（ちくま学芸文庫、平5）や石原千秋（他）『読むための理論』（世織書房、平3）などがあった。これらは有益かつ便利な本であったものの、テクスト至上主義側面も強く、その価値は不変であるとしても、文学研究をとりまく状況も変化しているわけで、実用書としてはいささか古く、有意義に活用することは難しくもあった。

そういったなかで、テクスト分析の入門／実用書である本書は、研究者が主には近代文学研究を学ぶ者のために同じ作業を

通して、テキスト分析や、要所では文学研究の方法や考え方を提示している。こういった種類の本は現在まで少なかったし、大学における近代文学研究教育に求められる点が実例されているから、本書を読みながら、もっと早く本書に出会っていれば、もっと早く出会いたかったと思うことが度々あった。本書が、はじめに書いた問い——テキストを分析的／研究的に読むというの、具体的にはどういったことなのか——を解決するための手助けをしてくれると思ったからだ。未だその問いの答えは模索中であるものの、『テキスト分析入門』はその手掛かりになるし、本書をもつて問い自体を問直すことも出来る。

個人的には、以下の点にもう少し言葉を割いて欲しかったように思う。第15章にて、「テキストから得られる実り」と述べられているが、全編を通して「〴〵かに書かれているか」を問題にし、「見えにくい読みとり・説明を持続的に展開していく意思こそが、テキスト分析最大のポイント」としているわけだから、こうした抽象的な表現でなく、「実り」自体を具体的に示して欲しかったと思う。もちろん、こういった表現がターゲットとなる読者（層）や本の性質によることも理解できるし、一貫してテキスト分析の技術的側面にことばを費やす姿勢には尊敬の念を抱くのではあるが、このようなすぐれた入門書を書く研究者の方々が、「テキスト分析」にどのような「実り」を感じているのかを知りたい人間も多いはずだ。

最後になるが、個人的な経験に基づく、「テキスト分析」

を「読解」や「解釈」と混同してしまい、苦労した経験がある。テキストを面白く、自分らしく読まなければならぬと思っていて、けれど、面白く、自分らしい読みなど簡単に出来るはずもなく、テキストを読むこと自体がいやになったことも長い期間あった。今になれば、読みの面白さや自分らしさとは、独りよがりな「読解」や「解釈」と表裏一体の関係であると思う。テキストが自分にはどう読める（可能性がある）のか（「読解」・「解釈」）ではなく、テキストに記されていることを他者と共有し／するために、テキストがどのように語られ／書かれているのか——、テキストが「〴〵かに書かれているか」——を明らかにすること。それこそが「分析」である。

今現在、こういった苦労や悩みを持った学生／院生も少なくないと思う。『テキスト分析入門』はそういった学生／院生の手助けになるのみならず、作家・作品に留まらず、近代文学を学ぶうえで、教養や基礎知識の面でも教えてもらうところが多い。

自らの立場・経験を踏まえたくうえで、近代文学を専攻する学生／院生にはぜひ『テキスト分析入門』を読むことをおすすめしたい。